

バングラデシュの女性たち②

男たちが後押し

家族の支えで海外研修へ

スレイヤ・ベグムさんは首相府の次官。バングラデシュにおける女性公務員の第1期生である。彼女は、息子さんが生まれて9カ月の時、研修で1年半の間、英国に単身で渡っている。彼女自身英国行きは迷ったということだが、「こんな機会はめったにない。子どもは家族に任せて行ってきなさい」。そう言って背中を押してくれたのは、義父だったという。夫や両親、そして義理の両親たちの支えなしでは、ここまで働き続けることはできなかったというベグムさん。

筆者は、核家族化が進む日本での待機児童問題について意見を求めてみた。ベグムさんは、「家族という枠に縛られない方法もある」と指摘した。「地域がサポートする方法もあると思う。例えば、子育てが一段落した主婦はお母さんとして大先輩。こうした主婦の方々にアドバイザーやシッターとして活躍してもらえ



ナズリーン・スルタナ中央銀行副総裁

ば、彼女たちの社会進出にもつながるのではないか」と答えてくれた。実際に調べてみると、日本では地方自治体の取り組みとして、地域内で子どもを預けたい人と預かりたい人をマッチングしたり、子育てを終えた方に新米お母さんがアドバイスを求めることができる場所や仕組みづくり

などを始める事例が増えているようだ。「仕事と子育てのダブルワーク。その両立は本当に大変。男女とも、そして社会も長期的な視点が重要」とベグムさんはご自身の経験も交えて語ってくれた。

ナズリーン・スルタナさんは、中央銀行副総裁。同国中銀のナンバー3という高い地位にある女性だ。インタビュー中、ご自身の仕事と子育ての経験について「もう大変だったのよ！」と言いつつも笑って語る魅力的な人だった。スルタナさんが出産した際、育児休暇は3カ月（現在は6カ月）だったという。その際、男性の同僚に冗談半分で



スレイヤ・ベグム首相府次官（右）と筆者

「3カ月も働かずに給料がもらえていいな」と言われ、激怒したという。すかさず「あなたのお母さんに同じことを言ってみなさいよ！」と言いつつ返したそうだが、心の中で「絶対に仕事で見返してやる！」と闘志を燃やしたという。

先にインタビューをしたベグムさんと同様、スルタナさんも、子どもが小さいときに研修で海外（ドイツ）へ単身留学した経験を持つ。留学を打診された時、子どものことを考えると前向きになれなかったというスルタナさんだが、夫の後押しが決断の決め手になったという。彼女の夫は、「僕と息子のことは心配ない。たった1年半だから。2人でうまくやる。ドイツに会いに行くよ」と言ってくれたのだとか。これを聞いた筆者も、あまりに愛のある後押しの言葉に感動した。いや参ってしまったのだ。



タミナ・ルムキ国際マーケティング課長（大手食品会社勤務）

働きやすい環境づくり

そんなスルタナさんだが、ご自身の経験から女性が働きやすい職場づくりが必要だと立ち上がり、銀行内に行員のためのデイケアセンターを設置。また子どもを預ける女性行員のために授乳の時間を設けるといった制度も作った。今では多くの女性行員がこれらの施設や制度を利用しているという。女性の活躍についてスルタナさんは、「家族の理解、職場環境が整った上で」と前置きして、「周りから『女性だから優遇（また



ダッカ大学。女子学生たちの姿も

は特別扱い) されている』と思われるのは、本当の意味での成功とはいえない」と語る。「後ろめたさを感じて萎縮することなく、とにかく自信を持つこと」が一番の秘訣^{ひみつ}だという。

タミナ・ルムキさんは、バングラデシュの大手食品会社で国際マーケティング課長を

務める。「結婚した当初は仕事はしていなかったの。家で義母を手伝いながら、テレビを見たり、ぼーっと過ごしたりという毎日だったわ」と振り返る。このように、結婚して家庭に入るバングラデシュ人女性も多いという。ルムキさんの場合は、「退屈だった。働きに出たい!と強く思うようになった」のが、働き始めたきっかけだ。

最初の職場で働きながら大学に通い、現在の会社に転職。「幹部クラス的女性も多く、男女どちらにとってもフレンドリーな会社」と話す。転職後に出産した子どもを両親に預けながら働くルムキさんは、無理なく仕事と子育ての両立をしていくには、家族だけでなく一緒に働く同僚の理解も必要だと強調する。「私にとっては同僚も『家族』のようなもの。1日のうち多くの時間を共に過ごしているから」とルムキさん。同僚と仕事のことでなくプライベートのことも共有しており、助け合いながら働いているという。

女性の社会進出の課題について、男性経営者にも聞いた。ダッカ大学の学長を務めるソブル・カーンさん

は、「女性が心置きなく相談でき、問題を随時解決していける体制が必要不可欠だ」と言い、自ら大学の環境改善に積極的に取り組んでいる。地元商工会議所の会頭を務めるナシム・マンズールさんも、「女性が安心して働ける職場が必要」だと話す。「よい職場環境というのは、クーラー完備とかおしゃれだとかではなく、『人』次第。企業の存続も地球の歴史と同じで、環境の変化にきちんと対応できたものだけが生き残る。対応とは、多様性を身に付けること。そして多様性の基本は男女が共に働く環境だ」と語る。

社会に根付く「助け合いの精神」

2017年6月号で紹介した犠牲祭では、イスラム教の教えもあり、神様にささげた牛やヤギの肉のうち3分の1は自分の家族で食べ、もう3分の1は親族へ、残りの3分の1は喜捨として貧しい人たちへ配る。1年間暮らした筆者は、バングラデシュ社会は助け合い精神にあふれていると感ずることが多かった。時代の変化とともに今後も働く女性は増えていこう。女性を支える施設や制度作りは重要だ。同国では、男女とも働きやすい環境を身近なところからつくるのが率先して行われていた。

金持ちも貧乏人も、男も女も、分け隔てなく助け合いながら生きていこうという伝統的な精神——それがバングラデシュ社会には根強く残っていた。



(田中 麻理/ジェトロ海外調査部
アジア大洋州課)